

老舗の街・尾張町シリーズ2

尾 張 町 物 語

尾張町を愛した一商人の目より

尾 張 町 物 語

石川県史によれば、加賀の国治世は白山に始まる。

白山は神仏混淆の時代だから白山本宮と白山寺よりなる。白山比咩神社は延喜の頃は小社に過ぎなかったが、仁明天皇の嘉祥元年(千二百年程前)勅命により殿閣を造営し免田、神田、請田を奉り国家守護の壇場と定めらる。神社は金剣、別宮等七社あり、また白山寺は僧最澄の開基に始まり、大聖寺柏野等諸院あり(国宝白山記に詳細記さる)、加賀の大半は社領に属しその勢威は物凄いものがあったが、平家の時代、白山衆徒(山坊子)は次第に勢を増し、遂に国手師高も手に負えず、反って神興を捧げて京都に迫り、平清盛は師高を流す結果となった。

その後師高は源三位頼政の謀議に加り殺害に処せられたので、神罰の結果だと勢い益々氣勢を挙げた。

寿永二年(1183)源頼朝挙兵に応じて、義仲信州より越中へ攻め来る。

義仲の兵僅に五万余騎、迎へ撃つ平維盛の兵は十万で到底勝算が無かったが、当時勢盛んな北陸第一の霊場白山大権現に戦勝を祈願する為、義仲は僧覚明を送った。

その効験からか、俱利伽羅の一戦は大勝を獲した。その頃加賀に林・富樫の二豪族あり、源平何れに属すべきか迷ったが、意を決して義仲の軍に加わり篠原の戦に軍功あり、これを契機として平家は敗退を重ね遂に義仲の軍が京都に入った。これが平家滅亡の因となった。その後義仲滅び、義経また頼朝に追われて北陸に下ることとなるが義経主従の逃亡、安宅の関、鳴和滝の故事はすべて架空の戯曲であったとしても、当時富樫は尚一人の豪族に過ぎなかった。その後二年余、文治元年(1185)源頼朝諸国に守護・地頭を置くこととなり、富樫家を左衛門に叙し加賀の守護とした。その後白山の僧兵は勢盛んであった。

二百五十年後、永享二年(1430)後花園天皇の頃、国守を富樫介に命じ白山の鎮座を仰せつけられ、さらに文明五年(1473)九月二十二日土御門の天皇の頃、

本願寺蓮如上人は富樫を頼って白山暴徒鍛冶せんとしたが、同十二年十月十六日白山本宮炎上し悉く烏有に帰して御神体だけ辛子して三宮に移した。その後再三の火災と内紛のため白山勢は次第に衰弱し、民衆の信仰も次第に本願寺の一向宗に移り本願寺門徒の領する事となった。

富樫が地頭となった文治元年(1185)より長享二年(1482)後土御門天皇の時、富樫政親が鞍ヶ岳に滅ぶまで三百年の間富樫は栄えた。

富樫泰家の孫家尚は大乘寺を建立し、延元元年(1338)足利尊氏に従い菊地武敏と戦いて功あり、新田義貞と戦いて之を敗って居る。富樫は居を野々市の地に構え、一族国中に充滿して一大勢力となった。その後応永年間満春は仏道に耽り居館の内に勝蓮寺を作ったが、内紛起り兄弟相争い加賀半国は赤松政則のものとなった。

一方、一向宗は本願寺三世覚如上人が正応三年加賀の地に下り、布教に従事し蓮如上人に至りて大成、文明五年(1473)吉崎に御坊堂を作るに至り宗徒次第に増加した。富樫は始めの頃は本願寺と相通して居たが、一向宗徒の勢力次第に増加するを見て之に反撃を加えんと欲するに至ったので、反って文治元年一向宗徒の為に鞍ヶ岳に滅される結果となった。

往昔、今の尾張町、中町、新町あたり一帯に久保村と云へる村落あり、金剣神社の分神を祀って氏神となし、之を久保市乙剣宮と称して甚だ繁昌して参拝人常に絶えず、近郷、近在より諸品を持ち出して市場を形勢した。世人之を窪市と呼べり、神仏混淆の頃とて久保市金剛寺と称して不動尊を併せ祭った。尾山御坊の繁栄と共に、この市場は甚だ繁昌した。この地を尾山と呼ぶ様に至り、今日に至るも田舎では今尚尾山と謂って居る。

金沢という名称は、芋堀藤五郎の故事から出たので砂金の産地であつたらしい。

当時加賀一円は本願寺御山御坊を中心とした農村民衆の自治領で、全国でも珍らしい武家の支配を受けない真宗共和国であつた。

当時この界限は乙剣宮を中心とした市場で、今の尾張町あたりは神社の境内として一面森林に囲まれていたらしい。こうして三百年近く平和は続いたのであつたが(元龜天正の頃)信長の軍(尾張勢)が一向一揆討伐の名の下に加賀へせめ入り、民家

を悉く焼き払い、住民を一人残らず逆殺するのが手口で、忽ち加賀は征服せられた。久保市宮も境内の森林も悉く焼き払われて枯木の林となった。それでこの辺は一時枯木村と名付けられた事がある。

当時加賀を守る一向宗の軍は地方豪族による外なく、森下城主亀田大隅、松任城主鍋木右衛門等であった。亀田は本願寺の命により河北郡二番旗本として、これより先、天正元年(1573)上杉謙信が加賀を攻略せんとして津幡に迫った時、之を撃退して能登へ走らせたが、柴田勝家には抗し得ず、遂に森下は落城して勝家の軍門に降った。

かくして枯木の村となった処へ、天正十一年(1583)前田氏が七尾城から入城して来た。先づ、尾張荒子の郎党小者をこの地に住ませたので、尾張町と称するに至った。また久保市の跡は四千石の家老西尾隼人に邸地として与えた。この邸は幕末まで続いたが、明治になり廃藩となって西尾は邸を売り払って去った。西尾邸はその後金沢出身の大阪商船社長の所有となり、空地として大正末までそのままであったので、浅野川方面振興策としてこれを買上げ歓楽街を作る計画もあったが折合わず、遂に逋信病院用地となってしまった。

久保市は、その後近江町へ移り今日の近江町市場の基となったが、久保市の宮は西尾邸の出来た時卯辰山に移される事となった。明治九年三月二十二日氏子の上申により、卯辰山から元の新町へ移り、同九月一日落成した。明治元年神仏湊の廃止により不動尊を源法院に移し、明治五年郷社に列せられた。

枯木町には一向宗道場があり、利家公入城後もこの地に寺院を集めて置かれ、その普寺町と称した事もあったが、寛永十二年5月(1639)犀川河原町より出火、南町、石浦町、堤町、尾張町、新町、中町等悉く焼失してからこの寺も焼け、この時町家に屋敷替を命ぜられた。

橋場町は昔河原で、天正の頃は荒地であったが、次第に家屋立ち並び仮家が掛け作り商をしたので掛作りの名がある。枯木橋は町端で、浅の川橋下には獸門台があったと言う。

浅の川を渡れば森下町、そこは一向宗の勇将亀田大隅の滅亡後その一族郎党が多く移り住んだのでその名があったが、亀田一族は柴田勝家の軍に滅された。その時

亀田は柴田の重臣溝口年左衛門の一子千熊を女婿として迎え、亀田家を継がせた。この千熊は後に亀田大隅高綱と称し、後柴田に仕える事となったが、勝家が畿ヶ丘に戦った時は秀吉方に付いた。その後朝鮮征伐にも従って明の大軍と戦いで大功あり、また秀吉と家康が不和になった時は、家康方に付いて大坂夏の陣に大功あり、豊臣方の豪傑伊团右衛門の首を取る等一躍勇名を挙げた。徳川家康に二条城に召されて以後当方に奉公すべしと御刃を拝領し、その翌日また尾張大納言に召されて御茶を下され、保正五郎の脇差を拝領し大いに面目を施した。その後浅野但馬守に仕え鉄砲大將を申付けられ亀田大隅と称したが、無情を感じて仏道に入り鉄齋と称して浪人となった。鉄齋の子樞兵衛も浪人して居たが、前田利家に召され一万石を賜り家臣に列せられた。然し賊將の子なればとて他の家臣に良く思われず、寛永十七年暗殺された。樞兵衛に一子あり、武功の者の子孫なればとて之を取立てんとの内命を受けた家老奥村伊像が預り育て、伊像の一字を与えて興助と名付けた。然し賊將の名を恥じ、また身の危険を慮ってか武士となるを好まず、町人となり紺屋の頭取となった。また亀田を亀甲屋と改め亀甲屋興助と名乗った。

かくして、亀田一族残党は色々変名して(森下屋、鼈宮谷等)世を忍び、次第に城外に群居した。これ森下町の名の起りである。森下屋八左衛門(森八)、森下屋忠三郎(森忠)も共に森下町の住人であった。森下町は現在東山町となって居る。

只一族の内、亀田金右衛門だけは森下村に止まり、後十村役となった。今尚その旧宅は森下村にあり、明治天皇北陸御巡幸の際安住所ともなったが、その後東京へ移り住み旧居は老朽して廃家となってしまった。

亀田岳信の墓は南森下村の奥観法寺村にあり、また西方寺を菩提寺となす。西方寺は元森下村(不動寺)にあり不動山西方寺と称す。亀田家滅亡後寛永十年金屋町へ移り、宝暦六年現在の平折町に移った。

森下屋忠三郎は代々森下町に住し漆商を営み、加賀藩御細工所(武具製造所)の御用商人として、また横目肝煎三人扶持を頂戴した。

文化二年金沢城炎上し、殿閣悉く焼失した時、御造営方主付として資材調達に尽した。当時前田藩は財政苦しく、老臣等は幕府から借金して仕事に掛かろうとしたが、藩主斉広公は之をしりぞけて領民から冥加金の名目で五千貫を集めて豪壮な建

物を再興した。

森忠七代忠三郎(別名吉村幸蔵重直)自記の御造營方日誌に、資材を集めた記録が残って居る。また当時、御造營に当った肝煎三名泉屋与右衛門、広岡屋伊助、森下屋幸蔵に与えられた感状を三家互宝函として保管して居る。

森忠家は亀田家菩提寺の門徒として、また三ツ葵の家紋を守って居る。文政八年橋場町へ移ったが、明治三年尾張町の現地に住むに至った。

かくて御山御坊を中心とする、真宗の住民による統治三百年に及ぶ平和も尾張勢信長の侵入により、一挙に撃滅せられ、一向一揆という暴徒が卑賤の汚名を着せられ、これを死守した豪族は賊将と呼ばれたが、勝てば官軍とは云いながら、信長の覇権による侵略に外ならないのである。

利家公入城以前の状態については詳細はわからないが、この地に浅野家惣右衛門なる町人が巨宅を構えて居たことあり、上杉謙信が単身上洛せし時、この家に宿泊して歓待を受けたので、色々賜物を受けた記録がある。

尾張荒子の移民の内には大阪屋丹齋、紙屋庄三郎等の名前が残って居る。また旧藩時代、尾張町に江戸三度という毎月飛脚宿あり(現在の石黒ファーマシーの処)、また加賀藩本陣宿住吉屋(今の十間町にあり)が今の森忠や元の小鍛冶あたりであり、交通の要所であった事がわかる。

新町は、尾張町の家が増え出町として出来たので、新町の旅屋と称し、伊勢神宮の神宮、福井、土佐の止宿所があった。神殿の飾をなし豪壮なものであったが、明治四年廃止となった。

その跡、梅若という劇場が生れた。また新町の突当りは、今の新橋がまだ出来て居らず鍵杖となって居たので鍵町ともいい、この地に能役者、鼓師等の芸能人それに付属する革細工人、丁金屋も居たので丁金小路ともいった。一九(いっく)席という寄席もここに出来て賑やかだった。久保市境内に泉鋳工師(泉鏡花の生家)が居た。

前田藩の治世になって善政が行われ人漸く安緒し、住民家業に励み三百年の平和が続いた。前田五代の名君松雲公以来学問技芸を振興し殖産興業を奨励して、陶器、漆器、絹織染色、製箔、象眼等が盛んになり、全国でも稀な美術王国を形成した。また能狂言、茶湯が流行し、悠長に生活を楽しみ百万石を謳歌する城下町となった。

幕末に漢学者にして仏法を非議せず、孔孟を論難した有名な国体論者野村空翠がある事を忘れてはならない。空翠は尾張町に住んだ一商人で、八田屋次左衛門という人である。安政五年、空翠雑話を出版して知人に頒ら藩主斉泰乃世子慶寧にも献上した。

当時当藩ではまだ勤王運動は無かったので、藩は大いに驚き、幕府を恐れて翌年版木を没収したが、この書により藩内に志士の発奮興起して勤王の動機を作った。この功績により、大正十三年春正五位を贈られた。

松田平四郎は文化四年、京都から招かれた青木木米を師として町会所の出資により、宮竹屋喜右衛門と共に窯を築き、青磁、染付、赤絵を焼いた。これを木米窯といい好評を得たが、文化五年金沢城炎上の為、藩の財政振わず木米もまた去ったので、僅か一年にして町会所から離れ、任田屋徳右衛門、越中屋兵吉之に代って民間の事業となったが、不幸にして振わず文化十一年遂に廃止した。松田平四郎筆墨店は始めは上尾張町に在り、後下尾張町に移った。

菓子屋には、森八の外に博労町に菓子屋吉蔵(慳田吉蔵)あり、三百五十年前、前田利家の好みにより生菓子を調整して藩の御用を受け、度々献上した。

尾山の土産として、また冠婚葬祭の引出物として欠くことの出来ないものになった。庶民の菓子、万頭、生菓子の元祖である明治の末まで続いた旧家であった。

明治維新になって世の中は一変した。尾張町は流行の先端を行く店が多くなった。三田洋品店と河合栄治郎、野村末次郎と共に洋品雑貨、洋酒等舶来唐物を取扱う事となり、当時から流行し出した巻煙草屋には吐雲堂と池田商店、春田清太郎あり、靴屋の大久保与五郎、保井徳平、洋服屋の勝木安次郎、村井喜兵、友田儀典(呉服店を兼ね橋場町)あり、ランプ屋の竹俣屋、洋酒の弘盛館、時計の山田支店、湯浅善次郎、洋菓子の七日堂、新聞書籍の雲根堂、叢文堂、牛肉の林(ト一)も珍しいものであった。

和菓子店の森八も長崎に習ってカスターラを始めるし、森忠も今まで菜種油万能だったのが、舶来の石炭油(石油)を扱い出した。漆は次第に洋塗料に変わって行った。別に高道町に酒造店を始めて森忠支店としたが、後に之を弟忠次郎に譲った。

古い店では細字左平、石黒福久屋、松田平四郎、吉野警甲店、明治二十年頃にはこの外袋屋の原小平、岡忠あり、金物店では小巖治市左衛門、中村里遊、筆墨では松田平四郎の外に、柴田久七、阪田庄助、大丸小平等多志齊々であった。

明治始年には今のNHK放送局あたりに金沢病院(今の大学病院)が建ち、明治二十九年第九師団が出来、また近江町市場も近かったので人がよく集った。劇場(福助座、尾山座、梅若)、映画館(第二菊水、大手館)、寄席一九席、その他旅館等相次いで出来たので、金沢一の繁華街として栄えた。年中行事として、近江町市場の初売り紅鯛、熊手、羽子板に雑沓し、橋場町・尾張町の夕涼には絵行燈を掲げ、縁日も出て賑い、盆には近江町の盆おどりが有名だった。

しかし、年移り月変って金沢病院は小立野へ去り、七連隊も無くなって、浅野川口の活況も次第に衰えて繁華の中心は片町方面へ移った。古いこの街尾張町は尾張勢進駐の名残りとしてその名を残したが、昔の誇りを忘れず愛郷の精神と伝説を重んじて守って行きたいものだ。

空翠の故事に習い、尾張町のルーツを探りこれを知人、校友に頼ち御批判をして貰う次第である。

昭和五十三年五月 森幸朔

参考書：石川県史
金沢市史
和田尚軒金沢叢書
森田柿園
金沢古蹟志
加賀志徴空翠雑話
明治二十年商工便覧
森栄松金沢城
田中喜男加賀能登の家
その他

あ と が き

先の小冊子「加賀国・尾張町」を発刊して以来、ここに生まれ育ってきた私達自身の町に対する愛着と活性化に対する熱意は、益々深まる一方となっております。時代の変化の流れを的確に捕え、伝統からの新しい創造を行い、未来へ向けての希望に満ちた変遷を指向する気持は、尾張町及び周辺地域の人々が等しく抱く願ひであります。そしてまた、こうした具体的な活動は、町内及び界限関係に反響を呼び、歴史から将来への展望に於いて各種ご意見、資料を教えて頂くことにつながり嬉しい思いをしております。若さという行動力が先行してしまうのが取柄の若手会を、暖かく見守ってくれる皆様にこの場を借りて深く感謝致します。

なお、今回の老舗の街・尾張町シリーズ2「尾張町物語」は、町内の森忠商店の亡くなられた先代の方(森幸朔氏)の調査された労作を、現店主のご理解とご協力によりそのまま発行させて頂きました。ただ、文中接続詞その他について現代口語調に改めたことをここにお断り致します。尾張町若手会としましては、今後も機会あるごとに、尾張町の良さを見出だすためにこうした小冊子を継続して発行して行きたいと存じておりますので、宜しくご支援方お願い申し上げます。

1986年12月発行

老舗の街・尾張町

若手会会長 石野 琇一